

流布本『徒然草』の係り結び

—分布の型と用法の展開—

山 口 雄 輔

序

「つれづれなるまゝ、に」と起筆され、「あやしうこそものぐるほしけれ」と、「こそ」の係りを使って、已然形で詠嘆的に結ばれる序段が示すように、王朝女流文学の文章において発達をみた係り結びの形式を、中世の僧侶の手になる随筆文学が踏襲していることは、不思議といえば不思議である。

「ぞ」「なん」「や」「か」「こそ」の五種類の係助詞のうちでもこの「こそ」は、『徒然草』諸本中、最も祖本に近いと言われている常縁本において、三三・九パーセントという、他の係助詞に比べて最も高い使用率で用いられている。そうした、「こそ」の優位というよう

な大局的な事実、流布本でも動かないであろうが、かえって箇々の用法に見られる一見些細な相違の中には、成立にもかかわらず重要な問題をかかえ込んでいることがある。

たとえば、常縁本における、

花橘は名にこそおへれ、梅のにほひにこそ、古のことも立ちかへり、恋しう思ひいでらる。(一九段)

のような文章で、二回目の「こそ」の結びはいわゆる破格であるが、流布本のこの箇所は、

花橘は名にこそおへれ、なほ、梅のにほひにぞ、いにしへの事も立ちかへり恋しう思ひいでらる。(一九段)

と、「こそ」が「ぞ」になっていて、結びは連体形で文

法的に正しく応じている。「こそ」を含む文と「ぞ」を含む文の中間に、「なほ」が介入してきちんと分かれているのも興味深い。これについて村井順氏は、平安朝の文法を正しく書けないのがむしろ本当であって、こうした破格用法こそ、常縁本が『徒然草』の原形に近い証拠であるとさえ論じておられる。本稿では、そうした論議に立ち入る以前の段階として、流布本（テキキストには、烏丸光広本を底本とした日本古典文学大系を使用）における、基本的な、数量的な調査による各係助詞の分布の型と、用法の展開を見ておくことにする。

〔注1〕 拙稿「常縁本『徒然草』の係り結び」『文教大学国文』第20号
 〔注2〕 村井順著『常縁本徒然草』〈解釈と研究〉九六頁

流布本『徒然草』の全文（和歌も含む）における係助詞「ぞ」「なん」「や」「か」「こそ」の総数は五八四例で、各係助詞の比率は次の表1のとおりである。「なむ」「なん」は「なん」に統一。「や」は疑問・反語の場合に限り係助詞と認め、いわゆる間投助詞の「や」

は除外した。百分率の数値は小数点以下二位を四捨五入してあるので、合計の一〇〇パーセントの値に多少の誤差が生じることがある。

表1 流布本徒然草（全文）

百分率	用例数	
28.6%	167 (2)	ぞ
1.7%	10	なん
15.8%	92	や
20.2%	118 (1)	か
33.7%	197	こそ
100%	584	計

注1()内は和歌に含まれる用例数。

表1の()内は、注の示すように和歌に含まれた数であるが、物語と違って、その数は極めて少なく、僅か三首しかない。次にその三首を掲げて、和歌の方を先にすすませてもらいたいと思う。

○殿守のとものみやつこそにしてはらはぬ庭に花ぞ散りしく
 歌（二七段）

注―よみ人は、新院と呼ばれた花園天皇

○ふたつ文字牛の角文字直ぐな文字歪み文字とぞ君

は覚ゆる 歌(六二段)

注—よみ人は延政門院(後嵯峨天皇第二女、

悦子内親王。幼少の頃父上皇を慕った歌。

○秋の野の草のたもとか花ず、きはにいでてまねく

袖と見ゆらん 歌(二三八段)

注—古今集・秋上の在原棟梁の歌。袖と袂と

いう語が一首の中にあってもよいかとい
う問いに定家がこの歌を引いて答える。

「ぞ」の結びに動詞をとるものが二首、疑問の係助詞
「か」に、推量の助動詞「らん」で応じたものが一首。

注に示したように、いずれも『徒然草』の作者自身が
詠んだ歌ではない。本稿では、和歌の係り結びについ
てはこれ以上論述しない。

次に、その三首を除いた散文のみの表を掲げ、表2
とする。この表から更に細かく引き出されてゆく事実
が特徴を語ることになる。

表2 流布本徒然草(散文)

ぞ	なん	や	か	こそ	計
---	----	---	---	----	---

用 例 数	百 分 率
165	28.4 %
10	1.7 %
92	15.8 %
117	20.1 %
197	33.9 %
581	100 %

「こそ」が三四%で最も多く、二位は近い数値の二
八%で「ぞ」が続き、「や」「か」は共に一〇%台。「か」
が「や」をやや上回る程度、古い歌物語などに好んで
用いられた「なん」は僅か一%で最下位である。なお、
このように表の説明の際には小数点以下を更に四捨五
入した数値で報告させていただく。

表3 流布本徒然草係助詞出現順位

全 巻	一 位	二 位	三 位	四 位	五 位
こ そ	ぞ	か	や	なん	

表3は、出現の多い順に上から数値抜きに並べたも
のである。こうすると順序が一目瞭然なので他作品と
比較するのも都合がよい。「こそ—ぞ上位型」とでも
言えようか。

『徒然草』はふつう上・下二巻に分けられている。百三十七段からを下巻とする分け方に従って、上・下巻別の表4を作っておくことにする。

表4 流布本徒然草 巻別一覧（和歌を除く）

下 巻		上 巻		
25.5 %	51	29.9 %	114	ぞ
3 %	6	1.0 %	4	なん
22 %	44	12.6 %	48	や
19 %	38	20.7 %	79	か
30.5 %	61	35.7 %	136	こそ
100 %	200	100 %	381	計

例によって、百分率などを一応算出するが、それらの数値を取り払って順位のみを表5を作ってみる。

表5 流布本徒然草 巻別係助詞出現順位

上 巻	一位
こそ	二位
ぞ	三位
か	四位
や	五位
なん	

下 巻	こそ	ぞ	や	か	なん
-----	----	---	---	---	----

表2と表5を比べてみると、上巻は、表5の全散文順位「こそ—ぞ—か—や—なん」と全く同じであるが、下巻の方は、「か」と「や」の転位が見られる。上巻では「か」が六五例一七%で、「や」の三八例一〇%を上回っていたのに、下巻では、「や」が四四例二二%で、「か」の三八例一九%より上位に来てしまう。以下、本稿では、上巻と下巻の差異を無視して、全体で調査を進める。

表6は、地の文・心話文・会話文などの言語場面の違いによる係助詞の分布の状態を見ようとしたものである。「序」でも述べたように、『徒然草』では、「こそ」が最も好まれているが、「ぞ」も地の文には多い。

表6 流布本徒然草（散文）

124	ぞ
7	なん
49	や
79	か
146	こそ
405	合計

合 計		会 話 文		心 話 文		地 文
28.4 %	165 (1)	16.4 %	37 (1)	11.1 %	4	30.6 %
1.7 %	10	2.1 %	3			1.7 %
15.8 %	92	20.7 %	29	38.9 %	14	12.1 %
20.1 %	117 (1)	22.1 %	31 (1)	19.4 %	7	19.5 %
33.9 %	197	28.6 %	40	30.6 %	11	36.0 %
100 %	581 (2)	100 %	140 (2)	100 %	36	100 %

注—(1)内は消息文の数で、会話文に含めた。
注—(2)内は消息文の数で、会話文に含めた。

表6の注(1)内は消息文の数で、会話文に含めてあるのだが、そのうちの一例は実は引用された和歌の部分である。例文の下の語は会話文であることを示す。

「折ならぬ音をなほぞかけつる」と弁の乳母のいへる返しに語(一三八段)

『千載集』哀傷の部に弁の乳母の歌として、あやめ草涙の玉にぬきかへてをりならぬねをなほぞかけつる

に扱っていることは明らかで、下の句をそっくりとついている。常縁本ではここが「をりならぬねをぞかけつる」となっていて、係り結びに破綻を生じ、また「なほ」の語も落として引かれている。こうした比較は係り結びの種々相にわたって改めて行うつもりである。

例によって、数値を取り除いて出現順位のみにより、三つの言語場面別に表7—(1)(2)(3)を作る。

なお、「誰」のあとの係助詞「そ」は、係助詞「ぞ」の濁らないものと考えて、「ぞ」の数の中に入れた。僅か二例なので次に掲げる。いずれも会話文中の断止法である。

○「いろをし、こゝに候ふ。かくのたまふは、誰そ」と答ふれば 語(一一五段)

○「誰そ」と見向きたれば、狐、人のやうについで 語(二三〇段)

表7—(1) 流布本徒然草 地の文中の出現順位

地の文の出現順位の上二位に着目して、「こそ—ぞ上位型」と呼ぶ。

地の文	一位
こそ	二位
ぞ	三位
か	四位
や	五位
なん	

表7—(2) 流布本徒然草 心話文中の出現順位

心話文	一位
こそ	二位
や	三位
か	四位
ぞ	

心話文では「や—こそ上位型」となる。

表7—(3) 流布本徒然草 会話文中の出現順位

会話文	一位
こそ	二位
ぞ	三位
か	四位
や	五位
なん	

会話文では、地の文と同じ「こそ—ぞ上位型」である。

表8 流布本徒然草(散文)

百分率	計	会話文		心話文		地の文		ぞ
		165	37	2.4%	4	75.2%	124	
100%	10	30%	3			70%	7	なん
100%	92	31.5%	29	15.2%	14	53.3%	49	や
100%	11	26.5%	31	6.0%	7	67.5%	79	か
100%	197	20.3%	40	5.6%	11	74.1%	146	こそ
100%	581	24.1%	140	6.2%	36	69.7%	405	計

表8は、これまで縦に見てきた比率を、横に見ようというものである。

表9 流布本徒然草(散文)

全 体	こ そ	か	や	な ん	ぞ	一位
地の文	地の文	地の文	地の文	地の文	地の文	一位
会話文	会話文	会話文	会話文	会話文	会話文	二位
心話文	心話文	心話文	心話文	ナシ	心話文	三位

例によって数値を省いて表9を作る。どの位も横一例に同じ言語場面が整然と並んでいる。つまり、どの係助詞も判で押したように地の文に最も多く、次に会話文、最も少ないのが心話文という使われ方をしていることがわかる。これは一見、当り前のように見えて実は作品ごとに異なり、また同一作品でも、係助詞の違いや異本によって表中に揺れを生じるものなのであるが、『徒然草』の場合は流布本も常縁本も全く同一で

ある。

二

次に、各係助詞に対応する結びの語がどうなっているかを調べた結果を次に示す。

表10によれば、結びが助動詞のものが四一%で、用例の半数に近い割合を占めていることがわかるが、これは、助動詞の種類も多いので、どの作品でも共通のことであり、要はどんな助動詞が結びにきているかが問題であるが、それについては本稿後半で改めて触れることにする。動詞・形容詞が一〇弱で比較的多用されている。省略用法と断止法も動詞・形容詞を上回る割合でかなり多く用いられている。名詞で結ぶ特殊な用法もある。

表10 流布本徒然草 係助詞の全用法

	係 り 用 法
動 詞	
補助動詞	
形 容 詞	
形容動詞	
助 動 詞	
名 詞	
省略用法	
消去用法	
断 止 法	
合 計	

それではこれから、係り結びの用法の展開を、実例に即して見て行くことにする。代表的な用例を最小限一例ずつは掲げて行く。各係助詞ごとに、三つの言語場面ではどうなっているか、横に百分率を算出した表

百分率	総数	こそ	か	や	な	ぞ
9.5%	55	31	5	11	1	7
0.7%	4					4
9.3%	54	34	1		1	18
1.5%	9	6				3
41.7%	242 (4)	93 (2)	54	19 (1)	4	72 (1)
0.2%	1	1				
15.8%	92	16	16	35	4	21
6.0%	35	16	13	1		5
15.3%	89		28	26		35
100%	581 (4)	197 (2)	117	92 (1)	10	165 (1)

注—()内は破格用法の数。

会話文		心話文		地の文		ぞ		係り用法
28.6%	2			71.4%	5	動詞		
50.0%	2			50.0%	2	補助動詞		
11.1%	2			88.9%	16	形容詞		
				100%	3	形容動詞		
6.9%	5	4.2%	3 (1)	88.9%	64	助動詞		
						名詞		
5.0%	1			95.2%	20	省略用法		
				100%	5	消去用法		
71.4%	25	2.9%	1	25.7%	9	断止法		
22.4%	37	2.4%	4 (1)	75.2%	124	合計		

表11 流布本徒然草 言語場面別用法

を各係助詞ごとに示す。結びの助動詞の用例は、後にまとめて掲げる。

百分率	合計
100 %	7
100 %	4
100 %	18
100 %	3
100 %	72 (1)
100 %	21
100 %	5
100 %	35
100 %	165 (1)

注(一)内は破格用法の数。

I 「ぞ」の係り用法

1 結びの品詞による分類

(1) 動詞

○増賀^{まが}ひじりのいひけんやうに、名聞^{みやうもん}ぐるしく、仏の御をしへに違ふらんとぞおぼゆる。【地】(一段)

注—例文の下の【地】は地の文。

○青葉になり行くまで、よろづにたゞ心をのみぞ惱ます。【地】(一九段)

注—常縁本の「丈六の仏九体、いとたふとく

ぞならばおはします」の例は「ぞ」が「て」になつて係り結びではなくなつたので代りにこの例を掲げた。

○門よくさしてよ。雨もぞふる。【語】(二〇四段)

(2) 補助動詞

○されば、「女の髪すぢをよれる綱には、大象もよく

つながれ、女のはける足駄にてつくれる笛には秋の鹿必ず寄る」とぞ言ひつたへ侍る。【地】(九段)

注—「侍り」が地の文に見える例。常縁本の

「八重桜は奈良の都のみにありけるを、

今の世にぞいづくにも多く侍る」は、流

布本そのあと更に「なる」が続くので助

動詞の扱いになるので、この例に代えた。

○染殿大臣も、「子孫おはせぬぞよく侍る。末のおくれ給へるはわろき事なり」とぞ、世継の物語にはいへる。【語】(六段)

注—「大鏡」の中で言っているといふので会話文として扱ふ。

注—「候ふ」の貴重な例である。

○これぞもとめ得て候ふ。【語】(二一五段)

注—「候ふ」の貴重な例である。

(3) 形容詞

○御仏名・荷前^{のまき}の使立つなどぞ、哀にやんごとなき。【地】(一九段)

注—形容詞の結びの連体形のあとに更に間投

助詞「や」のくる用法が二例あつた。

(4) 形容動詞

○年の暮れはてて、人ごとに急ぎあへる比ぞ、また

なくあはれなる。地(一九段)

○行成大納言の額、兼行が書ける扉、あざやかに見

ゆるぞあはれなる。地(二五段)

○今の世のこと繁きにまぎれて、院にはまゐる人も

なきぞさびしげなる。地(二七段)

注―結びに形容動詞のくる例は、地の文にお

けるこの三例ですべてである。

2 結びのない用法

(1) 結びの省略用法

①〈言ふ〉系の語の省略

○たびく強盗にあひたるゆゑに、この名をつけた

るとぞ。地(四六段)

注―〈言ふ〉系の語の省略用法が、省略用法

の大部分で、地の文では二〇例中一九例

である。

②〈在り〉系の語の省略

○この比の歌は、一ふしをかしく言ひかなへたりと
見ゆるはあれど、古き歌どものやうに、いかにぞ

や、ことばの外に、あはれに、けしき覚ゆるはな
し。地(一四段)

注―〈在り〉系の語の省略用法は、この例一

つだけである。なお、常縁本に、「さては

いみじくぞ」という心話文の例があるが、

流布本では「ぞ」が「こそ」になつてい

る。

③〈為〉系の語の省略

○犬のことくしくとがむれば、下衆女の出でて、

「いづくよりぞ」と言ふに、語(一〇四段)

(2) 結びの消去用法(いわゆる「結びの流れ」)

①接続助詞による消去用法

○綾小路宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや繩

をひかれたりしかば、かの例思ひ出でられ侍りし

に、地(一〇段)

②係助詞による消去用法

○新古今には、「この松さへ峰にさびしき」といへ
る歌をぞいふなるは、まことに、少しくだけたる
すがたにもや見ゆらん。地(一四段)

③中止法による消去用法

○人の気色も、夜の火影ぞ、よきはよく、物言ひたる声も、暗くて聞きたる、用意ある、心にくし。

地 (一九一段)

II 「ぞ」の断止法 (文末用法)

1 単独係助詞

○かく人に恥ぢらる、女、如何ばかりいみじきものぞ』と思ふに、女の性は皆ひがめり。☑ (一〇七段)

注—心話文を示す『』は特に施す。

2 複合係助詞

実は流布本には断止法における複合係助詞の例は皆無である。常縁本に次のような例がある。

○「しかじかのことは、あなかしこ、跡のため、いむなることぞなむ」といひあへるこそ、☑ (三〇段)

傍線を施した部分は流布本では「など言へるこそ」となって更に文は続き「こそ」の結びは已然形できちんと結ばれている。

なお、「ぞ」には破格用法は見当らない。

表12 流布本徒然草

合計	会話文		心話文		地の文		なん		係り用法
							動詞		
1	100%	1						補助動詞	
1					100%	1	形容詞	形容動詞	
4	25%	1			75%	3	助動詞	名詞	
4	25%	1			75%	3	省略用法	消去用法	
								断止法	
10	30%	3			70%	7	合計		

百分率	100%
	100%
	100%
	100%
	100%
	100%

注—破格用法はない。

I 「なん」の係り用法

1 結びの品詞による分類

(1) 動詞

○情なしと恨み奉る人なんある」とのたまひ出^{いだ}したるに、語(二三八段)

注—常縁本では「なむあり」とあつて、結びに終止形がくる破格用法の一つになつてゐる。

(2) 形容詞

○そのほど過ぎぬれば、かたちを恥づる心もなく、(中略)ひたすら世をむさぼる心のみふかく、ものあはれも知らずなりゆくなん、浅ましき。地(七段)

注—結びの形容動詞は見当らない。助動詞の場合には後に触れる。

2 結びのない用法

(1) 結びの省略用法

○あへて凶事なかりけるとなん。地(二〇六段)

注—これは「言ふ」系の語の省略。

○御覧じかなしませ給ひてなん。語(一〇段)

注—右は「為」系の語の省略。

(2) 結びの消去用法 ナシ

II 「なん」の断止法 ナシ

常縁本に見られた紛らわしい例はない。

表13 流布本徒然草 言語場面別用法

地の文			や		係り用法
2	27.3%	3	動詞	補助動詞	
			形容詞	形容動詞	
3(1)	42.1%	8	助動詞	名詞	
6	57.1%	20	省略用法	消去用法	
	100%	1			
3	65.4%	17	断止法		
14(1)	53.3%	49	合計		

百分率	合計	会話文		心話文
100%	11	54.5%	6	18.2%
100%	19 (1)	42.1%	8	15.8%
100%	35	25.7%	9	17.1%
100%	1			
100%	26	23.1%	6	11.5%
100%	92 (1)	31.5%	29	15.2%

注—()内は破格用法の数。

I 「や」の係り用法

1 結びの品詞による分類

「や」の係り用法は、表13でわかるように、品詞別では動詞と助動詞の項にしかない。助動詞は後にまとめて触れるので、ここでは動詞の例だけを各言語語場面から一例ずつ掲げておく。

○そもまたほどなくうせて、聞きつたふるばかりの末々は、哀れとやは思ふ。[四] (二〇段)

○次に轡・鞍の具に、『危き事やある』と見て、心にかゝる事あらば、その馬を馳すべからず。[四] (一八六段)

注—心話文を示す『』は特に施す。

○「我はさや思ふ」など争ひ憎み、[四] (一二段)

2 結びのない用法

(1) 結びの省略用法

① 〈在り〉系の語の省略

○徳の至れりけるにや。[四] (六〇段)

注—「や」の省略用法は「ぞ」の場合と対照的で、ほとんどこの〈在り〉系の語の省略用法で占められ、〈言ふ〉系の語の省略

は、僅か二例しかない。

② 〈言ふ〉系の語の省略 ナシ

③ 〈為〉系の語の省略

○「橋本や、なほ水の近ければ」と覚え侍る。[四] (六七段)

注—心話文のあとに、「それ(実方)ならむ」

などが省略されている。

(2) 結びの消去用法

○綾小路の宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや
縄をひかれたりしかば、**㊦**(一〇段)

注—この例は、既に「ぞ」の項でも出してある。「や」の消去用法はこの一例のみ。

II 「や」の断止法

1 単独係助詞

○況んや一刹那のうちにおいて、懈怠の心ある事を
知らんや。**㊦**(九二段)

2 複合係助詞

○『この聖、声うちゆがみ、あらくしくて、聖教
の細やかなる理、いと弁へずもや』と思ひしに、

㊦(一四一段)

表14 流布本徒然草 言語場面別用法

か	係り用法	
	動詞	
	補助動詞	
	形容詞	
	形容動詞	
	助動詞	
	名詞	
	省略用法	
	消去用法	
	断止法	
合計		

I 「か」の係り用法
1 結びの品詞による分類

百分率	合計	会話文		心話文		地の文	
100%	5			20%	1	50%	4
100%	1	100%	1				
100%	54	33.3%	18	1.9%	1	64.8%	35
100%	16	6.3%	1	6.3%	1	87.5%	14
100%	13	7.7%	1			92.3%	12
100%	28	35.7%	10	14.3%	4	50%	14
100%	117	26.5%	31	6.0%	7	67.5%	79

注—破格用法はない。

(1) 動詞

○いかなるをか善といふ。 圃(三八段)

○身を養ひて何事を待つ。 圃(七四段)

○物皆げんげ幻化なり。何事が暫くも住する。 圃(九一段)

注—右の三例が、流布本における地の文の

「か」のすべてである。常縁本にはこの

ほかに二例見られたが、流布本では係動

詞がなかったり、助動詞で応ずるものと

なつて、ここで扱えない。三例をことさ

ら全部掲げたのは、文体に特色があると

思われたからである。いずれも漢文脈的

な短文に集中している。

○されば、一生のうち、むねとあらまほしからん事

の中に『いづれかまさる』とよく思ひくらべて、

第一のいちじことを案じ定めて、その外は思ひすてて、

一事いちじをはげむべし。 圃(二八八段)

注—右の引用文全体は一つの長い文であるが、

『内の心話文(特に施した)、すなわ

ち「か」の出現する部分は完結した極め

て短い文であることに留意したい。

(2) 補助動詞 ナシ

(3) 形容詞

○「亡者まうじやの迫善はくぜんには、何事が勝利おほほき」と尋ねさ

せ給ひければ、 圃(二二二段)

2 結びのない用法

(1) 結びの省略用法

① 〈言ふ〉系の語の省略

○新院しんいんのおりるさせ給ひての春、詠ませ給ひけると

かや、 圃(二七段)

注—「か」の結びの〈言ふ〉系の語の省略用

法は、地の文に六例だが、すべてこの「と

かや」という連語である。

② 〈在り〉系の語の省略

○数行すぢうも如何なるべきにか、若もんす数歩すほの心か、覚束さくすな

し。 圃(二三八段)

○「如何なることのあるにか」と、おし返しとひに

やるこそ、心づきなけれ。 圃(二三四段)

注—〈在り〉系の語の省略は「にか」となる

③ 〈為〉系の語の省略

○「……」など言へるこそ、「かばかりのなかに何かは」と、人の心はなほうたておぼゆれ。㊦(三〇段)

(2) 結びの消去用法

① 接続助詞による消去用法

○かほどの理、誰か^{ことわり}は思ひよらざらんなれども、折からの、思ひかけぬ心地して、胸にあたりけるにや。㊧(四一段)

○「ひさくの柄はひもの木とかやいひて、よからぬ物に」とぞ、ある人仰せられし。㊨(三二二段)

注―消去用法にも連語「とかや」が数例見える。

② 体言による消去用法

○因幡国^{いなばのくに}に、何の入道とかやいふ者の娘、㊩(四〇段)

注―体言に続く消去用法はすべて連語「とか

や」であり、「某^{なにがし}とかやいひし世捨人」

(二〇段)「なにかしの律師とかやいふも

の」(二三四段)「資季^{すけよ}大納言入道とかや

聞こえける人」(二三五段)「一言芳談と

かや名づけたる草子」(九八段)などの例がある。会話文を受けて、「といふこと」に続く次のような例も見える。

○「兀竜^{かぎりま}の悔あり」とかやいふこと侍るなり。㊪(八三段)

③ 中止法による消去用法

○誰をか恥ぢ、誰にか知られん事を願はん。㊫(三八段)

○今日の暮る、間、何事をか頼み、何事をか営まん。㊬(一〇八段)

注―いずれも漢文脈の対偶表現に現れる。当然のことながら対になって現れる下句の「か」には結びがあるが、上句の「か」の結びは中止法によつて流れてしまう。

対偶消去法とでもいうべきか。

II 「か」の断止法

1 単独係助詞

○寸陰惜しむ人なし。これよく知れるか、おろかなるか。㊭(一〇八段)

注—右の例も対偶表現であるが、消去用法でなく断止法である。上の「か」は断止法であって同時に中断用法であると言えよう。

○忍びて寄する事どもの床しきを、それか、かれかなど思ひ寄すれば、**㊦**(一三七段)

注—慣用的な並立用法と言える。

2 複合係助詞

○五月、あやめふく比、**㊦**早苗とるころ、水鶏のた、くなど、心ほそからぬ**か**は。**㊦**(一九段)
 なお、「か」にも破格の用例に見当たらない。

表15 流布本徒然草 言語場面別用法

	こ		
	そ		
		係	り 用 法
24	動 詞		
	補助動詞		
30	形 容 詞		
5	形容動詞		
70(2)	助 動 詞		
	名 詞		
6	省略用法		
11	消去用法		
	断 止 法		
146(2)	合 計		

I 「こそ」の係り用法
 1 結びの品詞による分類

百分率	合 計	会 話 文		心 話 文		地 の 文
100%	31	13.0%	4	9.7%	3	77.4%
100%	34	11.7%	4			88.2%
100%	6	16.7%	1			83.3%
100%	93(2)	20.7%	19	4.3%	4	75.3%
100%	1	100%	1			
100%	16	37.6%	6	2.5%	4	37.5%
100%	16	31.3%	5			68.3%
100%	197(2)	20.3%	40	5.6%	11	74.1%

注—()内は破格用法の数。

(2) 動詞

○よき人の物語するは、人あまたあれど、一人に向きていふを、おのづから人も聞くにこそあれ[㊦](五八段)

注―「こそ」の結びに動詞がくる場合、ラ変が最も多く、動詞の全用例の三分の一強、一二例を数える。「あれ」の他、「侍れ」などが見える

○かの木の道の匠の匠の造れるうつは物も、古代の姿こそをかしと見ゆれ[㊦](二二段)

注―ラ変の次に多いのが「見ゆれ」で、五例ある。

○走り出でて行きつ、習ひ侍りにけりと申し伝へたるこそ、ゆ、しくありがたう覚ゆれ[㊦](一八八段)

注―「見ゆれ」に近く、四例ある。

○いづくにもあれ、しばし旅だちたるこそ、めさむる心ちすれ[㊦](一五段)

注―厳密には「めさむる」が「心地」を修飾しているので、「心地」名詞、「すれ」サ

変已然形と分れるが、「心地すれ」して数えると三例ある。

○「ものあはれは秋こそまされ」と人ごとにいふめれど、[㊦](一九段)

注―有名な文。会話文である。「まさる」は二例

○片田舎の人こそ、色こく万はもて興すれ。

注―見当代の新しい言葉のように見える漢語のサ変動詞「興ず」は、すでに『枕草子』に四・五例見える。ただし『枕草子』では接頭語「もて」のついた「もて興ず」という例は見られない。

○あふさきるさに思ひみだれ、さるは独寝がちに、まどろむ夜なきこそをかしけれ[㊦](三段)

(3) 形容詞

注―「こそ」の結びに形容詞がくるのは他の作品では決して多いとは言えないのに、

『徒然草』ではとりわけ地の文に多彩に登場する。表15に示すように地の文に三

○例、話の文に四例であるが、この作品

の一つの特色と思われるので形容詞すべ
ての語と用例数を多い順に並べておく。

終止形で掲げるが、文中では已然形であ
ることは断わるまでもない。

「をかし」(九例)「いみじ」(四例)「よし」(三例)
「おもしろし」(二例)「心ぼそし」(二例)「なし」
(二例)以下一例ずつのもの：「あいなし」「うれ
し」「おほし」「心づきなし」「心にくし」「なまめ
かし」「本意なし」「見苦し」「ものぐるほし」以上
であるが、有名な序段の「ものぐるほしけれ」で
結ばれる例を改めて掲げる。

○つれづれなるまゝに、日暮らし、硯すずりにむかひて、
心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書
きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。㊦

(序段)

(4) 形容動詞

○名利に使はれて、閑しづかなる暇いとまなく、一生を苦しむ
るこそ、愚かなれ。㊦(三八段)

注—「こそ」の結びに用いられた六例の形容
動詞のうち、右の「愚かなり」一例を除

き、他はみな「あはれなり」である。短
い文と長い文の例を一例ずつ。

○折節せうせつの移りかはるこそ、ものごとものごとに哀あはれなれ。㊦(一
九段)

○暮る、ほどには、立て並べつる事ども、所なく並
みみつる人も、いづかたへか行きつらん、ほどな
く稀に成りて、車どものらうがはしきもすみぬれ
ば、簾たなみも取り払ひ、目の前にさびしげになり
ゆくこそ、世の例たましも思ひ知られて、哀あはれなれ。大路
見たるこそ、祭見たるにてはあれ。㊦(二三七段)

注—二つの文を引いたのは、この部分が常縁
本ではかなり異なっているからである。

「：目の前に淋しげになりゆくこそ、世
のためしと思ひ知られて、あはれなれと、
おぼえたるこそ、祭見るにてはあれ」と
いうように、常縁本では引用の格助詞
「と」で引かれた心話文中に「こそ」が
入ってしまう。この箇所はまた、非常に
長文であって、例の対偶消去法の短文と
比べて対照的である。

○里人おこりてで出であへば、「我こそ山だちよ」と言ひて、走りかゝりつゝ、斬り廻りけるを、誦（八七段）

注―結びを名詞としないわけにはいかない特殊な例。更に間投助詞「よ」が付着してゐる。通常は「我こそ山だちなれ」とありたいところ。

2 結びのない用法

(1) 結びの省略用法

① 〈在り〉系の語の省略

○深く信を致しぬれば、かゝる徳もありけるにこそ。地（六八段）

注―「こそ」の結びの省略用法一六例中、一

四例を占める。

② 〈為〉系の語の省略

○「あまりに物さわがし。雨やみてこそ」と人のいひければ、誦（一八八段）

注―渡辺の地に住んでいた上人に、人々が言

う場面。「雨が止んでからいらっしやつて

は」の意で「行き給へ」などが略されて

いる。

(2) 結びの消去用法

○人にまされりと思へる人は、たとひ言葉に出でてこそ言はねども、円心にそこばくの^{まは}とがあり。地（一六七段）

注―「こそ」の結びの消去用法はすべてが接続助詞による「結びの流れ」である。ただし、その接続助詞の箇所を格助詞と解する考え方も成り立ち得る。

○いにしへは、「車もたげよ」、「火か、げよ」とこそいひしを、今様の人は、「もてあげよ」、「かきあげよ」といふ。地（二二二段）

注―格助詞とみなせば、「古い時代には、……と言つたのを」となるが、ここでは逆接の接続助詞とみて消去用法の数に加えておく。

三

結びの中で最優勢の助動詞を取り上げる。

流布本『徒然草』の係り結び—分布の型と用法の展開—

表 16 流布本徒然草（結びの助動詞一覽）

地の文	な ん			ぞ				
	会話文	心話文	地の文	会話文	心話文	地の文		
						1	る	自発可能
						1	られ	
				2			つ	完了
						1	ぬ	
						1	たり	
						4	り	過去
	1			1	1(1)	7	き	
			3	1		23	けり	断定聞
						1	なり	
						2	なり	推量
					1		けん	
2					1	1	らん	
4						1	ん	
2						9	べし	
				1		1	まし	
						5	めり	打消
						4	ず	
							まじ	打消推量
						2	まほし	
8	1		3	5	3(1)	64	合	計

百分率	合計	こ そ			か			や	
		会話文	心話文	地の文	会話文	心話文	地の文	会話文	心話文
2.1%	5	2		2					
0.8%	2			1					
0.8%	2								
0.4%	1								
1.7%	4	1		1	1				
2.5%	6			1				1	
10.3%	25(3)	2		11(1)	1				1(1)
14.9%	36	5		2	1			1	
7.0%	17(1)	1	1	14(1)					
2.1%	5			3					
4.5%	11			2	3		3	2	
2.8%	7				1			2	
25.6%	62	5	3	12	7		26	2	2
10.7%	26			8	4	1	2		
1.3%	3						2		
5.0%	12			6					
4.1%	10	2		2			2		
0.8%	2			2					
2.5%	6	1		3					
100%	242(4)	19	4	70(2)	18	1	35	8	3(1)

注—()内は破格用法の数。

この場合も表が多くを語っているので、細かな説明は省くが、まず全体から見ても、「ぞ」と「こそ」の地の文にべったりと集中して現われている。次に会話文に目立つのは、「か」と「こそ」の行である。心話文にはどの係助詞の行も少ないが、「なん」にいたっては皆無である。「なん」は過去の助動詞「き」「けり」に四例あるに過ぎない。

「つ」「ぬ」「たり」「り」などの完了の助動詞に「ぞ」は応じているが、「こそ」は「たり」と「り」に一例ずつ応じているだけである。

数から言うと、推量の「ん」が六二例・二六パーセントで最も多い。過去の「けり」「き」、推量の「べし」、断定の「なり」、推量の「めり」など（多い順）には、言語場面を限定せずかなり散在している。打消および打消推量の「ず」「まじ」と、希望の「まほし」には、「ぞ」と「こそ」が専有している（「か」の二例が例外的にあるにはあるが）。それでは実例に即して見て行くのとする。表16で示した助動詞の種類別（種類別）（種類別と言っても代表的な意味を出しただけで、

文脈によって異なる意味を全部出したわけではない。「なり」に限って、断定と、伝聞推定ときちんと分けてある。横の段で最も数値の多いものの中から代表例を一例選び、簡単な注をつけて行くという原則に従って掲げて行く。ただし、横の段に一例しかないものはむろんその一例を掲げる。

る 〈自発・可能〉 五例

○大方は家居にこそ、ことさまはおしはからるれ。

地 (一〇段)

注―「る」は「こそ」に四例、「ぞ」に一例応じていて、五例中四例が自発である。次に可能の例を挙げておく。

○吾妻人こそ、言ひつる事は頼まるれ。語 (一四一段)

注―「頼まるれ」は「頼みにできる」の意で可能。可能はこの例だけ。

らる 〈自発〉 二例

○花たちばな橘たちばなは名にこそおへれ、なほ、梅の匂ひにぞ、いにしへの事も立ちかへり恋しう思ひいでらる、地

(一九段)

注—地の文の「ぞ」と「こそ」に一例ずつだけ。「ぞ」の例を引く。

つ <完了> 二例

○折ならぬ音をなほぞかけつる註(一三三八段)

注—『千載集』の歌の下の句によっている消息文。

ぬ <完了> 一例

○たてあけ所せげなる遣戸よりぞ入り給ひぬる。地

(一〇四段)

注—「ぞ」に応じた貴重な唯一例。

たり <完了> 四例

○無量寿院ばかりぞ、その形として残りたる。地(二

五段)

注—地の文の「ぞ」に一例。他に、会話文の

「か」に一例、「こそ」には地の文・会話文に一例ずつ。

り <完了> 六例

○源氏物語には「物とはなしに」とぞ書ける。地(一

四段)

注—「ぞ」の地の文に四例の他、「や」の会話

文に一例、「こそ」の地の文に一例。見出しに「完了」としたが、厳密には、掲げた例文の訳は「書いてある」の意で完了というより存続。

き <過去> 二五例

○齋王の野宮ののみやにおはしますありさまこそ、やさしく、

面白き事のかぎりとは覚えしか。地(二四四段)

注—「ん」(二六%)、「けり」(一五%)に次ぐ

出現率(一〇%)の高い助動詞。「べし」

がほぼ等しい出現率(一一%)を持つ。

破格用法が集中しているので、三例すべ

てを次に掲げておく。心話文の「き」と

「や」、地の文の「こそ」に一例ずつであ

る。

○月に見ゆる物も、わが心のうちも、かゝる事のい

つぞやありしかと覚えて、心(七一一段)

注—常縁本・正徹本は、この部分が「ありし

は」となっている。

○目に見ゆる物も、わが心のうちも、かゝる事のい

つぞやありしかと覚えて、心(七一一段)

注―例文は直前の文と全く同じもの。「ぞや」を「ぞ」と「や」に分けてカードをとっていることを示したものの。

○とことわられ侍りしこそ、この聖、声うちゆがみ、あらくしくして、聖教の細やかなる理、いと弁へずもやと思ひしに、この一言の後、心にく、成りて、多かる中に寺をも住持せらるゝは、かくやはらぎたる所ありて、その益もあるにこそと覚え侍りし。地(一四一段)

注―「覚え侍りしか」とありたいところ。常縁本では「おぼえ侍りしなり」となっているが、これも破格である。

けり
〈過去〉 三六例

○坊の傍に、大きな榎の木えのきのありければ、人えのきの木僧正かたわらとぞ言ひける。地(四五段)

注―「けり」も「き」も多用されているが、

二つの違いは、「き」が「こそ」に、「ぞ」が「けり」に多く応じていて対照的である。

なり
〈断定〉 一七例

○すべて神の社こそ、すてがたく、なまめかしきものなれや。地(二四段)

注―係り結びで完結した文末に、更に間投助詞「や」の付いた例。一七例中、「こそ」に一三例が集中している。中に破格が一例あるので次に掲げておく。

○鯉ばかりこそ、御前にも切らるゝものなれば、やん事なき魚なり。地(一一八段)

注―「切らるゝものなれば」の接続助詞で結びが流れているとも考えれば破格ではなくなる。

○ひとり灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなうなぐさむるわざなる。地(一三段)

注―「ぞ」からの貴重な一例。

なり
〈伝聞推定〉 五例

○たゞいふ言葉も、口をしうこそなりもてゆくなれ。地(二二二段)

注―「なつてゆくようだ」の意の伝聞推定。従つて、その上の複合動詞「なりもてゆ

く」は、四段活用の終止形とみなす。

○「酒をとりて人に飲ませたる人、五百ごひゃくしやう生が間、手なき者に生る」とこそ、私は説き給ふなれ。 地(一七五段)

注—「私がお説きになるのである」と断定にとるよりも、「お説きなざるそうだ」と伝聞推定に解するべきところ。補助動詞「給ふ」はここでは終止形とみなす。

けん 〆過去推量 一一例

○花に鳥付けずとは、いかなる故にかありけん、長月ばかりに、地(六六段)

注—「けん」は数は多くはないが、「なん」を除く四つの係助詞に依じている。右の例は、係り結びは成立しているものの、完結しないで中断して続いて行く用法、中断あるいは中止用法というべきか。

らん 〆現在推量 七例

○知りたる事も、なほさだかにと思ひてや問ふらん。地(二三四段)

注—過去推量「けん」に比べると数が半減し

ている。

ん 〆推量 六二例

○折にふれば、何かはあはれならざらん。地(二一段)

注—助動詞中、数の上で最も優勢なのがこの「ん」である。六二例中二六例が、「か」に依じている。文脈によって推量以外の意味にもなることは言うまでもない。

○桃李の言はねば、誰とともにか昔を語らん。地(二五段)

注—「誰とともに昔を語ろうか」の意で、これは意志の例。

べし 〆推量・当然 二六例

○人は己おのれをつまやかにし、奢せちりを退けて、財たからをもたず、世をむさばらざらんぞ、いみじかるべき。地(一八段)

注—見出しを「推量」としたが、文脈によって種々の意味になる。ここは当然の意。「き」とほぼ等しい率(一〇%強)で比較的多用される。「ぞ」と「こそ」の地の

文によく使われている。説教めいた言い方が『徒然草』の作者の好みに合うのかもしれない。

まし

〈推量〉 三例

○『しやせまし、せずやあらまし』と思ふ事は、おほやうは、せぬはよきなり。〔心〕(九八段)

注―「まし」が続いて出てくるが、上の「まし」は中止用法である。

めり

〈推量・婉曲〉

○ことに、かたほとりなるひじり法師などぞ、世の人の上は、わがことと尋ね聞き、いかでかばかりは知りけん^とと覚ゆるまでぞ、言ひ散らすめる。〔地〕(七七段)

注―初めの「ぞ」が、後の「ぞ」を包含している特殊な例。推量というより婉曲。

ず

〈打消〉 一〇例

○老いぬと知らばなんぞ閑に身をやすくせざる。〔地〕

(二三四段)

注―単なる打消表現でなく、何となく教訓臭がつきまとう。

まし

〈打消推量〉 二例

○さて冬枯のけしきこそ、秋にはをさくおとるまじけれ。〔地〕(一九段)

注―「まし」の二例は「こそ」にしか応じていない。二例とも掲げておく。

○女となげしに尻かけて、物語するさまこそ、何事にかあらん、尽きすまじけれ。〔地〕(一〇五段)

注―「尽きす」は自動詞サ変の終止形。「つきすまじけれ」で、(男と女の話が)尽きるこたがないようだ」の意。

まほし

〈希望〉 六例

○智恵と心とこそ、世にすぐれたる誉も残さまほしきを、つらく思へば、〔地〕(二三八段)

注―この例は、接続助詞で結びが流れているが、常縁本では、「残さまほしき」で完全に切れて、「つらく思へば」は別文となっている。

以上で、流布本『徒然草』の係助詞の結びとして表れた助動詞のすべての種類について、少なくとも代表例一例と、問題を持つ例をほとんど掲げることができ

た。常縁本『徒然草』の報告の表や説明文と重複するところが多々あることをお許しいただきたい。微妙な違いは至る所にあり、それが成立時代の語法の変遷によるものか、異本作りの過程で起きた作者ならぬ本製作者の好みによるものであるかは、今後の検討にまたなければならぬ。とりあえず、あるがままの実体を報告しておきたいと思う。

結 び

ここまで調査検討してきたことから、流布本『徒然草』の係り結び（係助詞の係り用法と断止法を認めた広い意味において）の特色ともいえるべきものの大要を列挙しておく。

- 1 流布本『徒然草』において、係り結びを含む和歌はわずか三首しかない。確定の係助詞「ぞ」の結びに動詞をとるもの（散りしくと「覚ゆ」が二首、疑問の係助詞「か」に、推量の助動詞「らん」で応じたものが一首である。

- 2 和歌を除く全散文においては、「こそ」が一九七例・三四％で最も多く、「ぞ」の一六五例・二八％

がその次にくる。常縁本で調査した結果を、今回はいちいち比較するつもりはないが、用例数には少々相違があるにもかかわらず、百分率の数値は全く同じである。そのようなことが随処で見られるのは、同一作品なのだから当然と言えば当然だが、それだけに相違にも留意しなければならない。「か」は一一七例・二〇％、「や」がそれに近く九二例・一六％で中位であり、古い物語などに好んで用いられた「なん」はわずか一〇例・二％で最下位にくる。この順位を分布の型と称し、上位二位に着目して、「こそぞ上位型」、最上位と最下位に着目して、「こそーなん遠隔型」などと呼んでおくことにする。

- 3 百三十六段と百三十七段で前後に分かれる上下二巻について、係助詞の数を別々にかぞえた限りでは、巻別の片寄りほとんど見られない。また、上巻と下巻に分けても、型の呼称に変更を要しない。しかし、型の呼称に使っていない中位の「や」「か」に転位が見られる。すなわち、上巻は「か—や」の順序であるのに対して、下巻では「や—

か」となるのである。(ただし、用例数の差は僅差であるので、巻別の詳細な調査はしていない。)

4 言語場面別の出現順位では、地の文において「こそ上位型」「こそーなん遠隔型」であるが、心話文では「こそーやーかーぞ」の順で、「や」が上位にきて、「こそーや上位型」「こそーぞ遠隔型」に変わる。常縁本ではこの所が違っていて「やーこそ上位型」「やーぞ遠隔型」であった。「なん」は心話文には姿を見せない。これは常縁本も同様。会話文では、型としては地の文と同じく「こそーぞ上位型」「こそーなん遠隔型」である。

5 係助詞別に、言語場面の順位を見ると、比率こそ違え一様に地の文に最も多く、二位が会話文、そして三位が心話文という現れ方をしている。係助詞によってはもつと異なる使い方が出てきてもよさそうなのに、表があまりにも整然とととのうのが不思議なくらいである。

6 結びに助動詞がくる用法が断然優勢(二四二例・四二例・四二%)であるが、とりわけ、「こそ」(九三例)と「ぞ」(七二例)でその過半数(助動

詞全体の六八%)を占める。ただし、「や」だけは省略用法(二〇例)の方が、助動詞(八例)を上回っている。

7 結びの省略用法が九二例・一六%で助動詞に次ぐ。従ってその用法も多彩で、係助詞によって「言ふ」系、「在り」系、「為」系の語のそれぞれの省略に省略に片寄りが見られる。数の少ない「なん」はともかくとして、「ぞ」の場合の省略用法は大部分が「言ふ」系の語の省略であるのに対して、他の三つの係助詞「や」「か」「こそ」は「在り」系の語の省略であることが多く、「か」は特に「にか」という形で、そのあとが省略される。「言ふ」・「在り」系以外の動詞を、ひとまとめに「為」系の語とするが、動詞の種類も数も無制限に多いはずなのに、用例はきわめて稀で、むしろ例外的でさえある。

8 断止法も八九例・一五%と、比較的多用されているにもかかわらず、「こそ」には断止法が全く見られない。

9 結びに敬語の補助動詞がくることは極めて少な

く、「ぞ」の四例以外は、これまたむしろ例外的でさえある。「ぞ」の四例とは「侍る」が三例、「候ふ」が一例である。

10 各係助詞の使われ方には文体的にもいろいろ特色があり、接続助詞などで結びが流れて（消去用法）王朝ふうの極めて長文のものがあるかと思えば、きびきびした短文にも用いられる。とりわけ「か」は漢文脈の短文に集中しており、中でもそうした漢文脈における結びの消去法には、対偶表現に現れるものも少なくなく、対偶消去法と呼んでもさしつかえないグループを形成している。

11 結びの助動詞の種類は、①「る」②「らる」③「つ」④「ぬ」⑤「たり」⑥「り」⑦「き」⑧「けり」⑨「なり」（断定）⑩「なり」（伝聞推定）⑪「けん」⑫「らん」⑬「ん」⑭「べし」⑮「まし」⑯「めり」⑰「ず」⑱「まじ」⑲「まほし」の一九種である。これは常縁本と全く同じである。この種類分けは「なり」だけが意味により断定と伝聞推定に分けてあるが、表に記された意味はあくまで代表的な意味で、文脈によって細分化するも

のである。一〇例以上出現する助動詞を多い順に挙げると、「ん」（六二例・二六％）「けり」（三六例・一五％）「べし」（二六例・一一％）「き」（二五例・一〇％）「なり」（断定）（一七例・七％）「めり」（二二例・五％）「ず」（二〇例・四％）の順になる。「ん」が抜きん出て多用されている。

12 破格用法について言うと、常縁本に二例見られた用言（動詞と形容詞に一例ずつ）の破格は、破格でなくなっていて（もし成立年代が、常縁本の方が古いとすれば、であるが）、助動詞だけに四例（過去の「き」における「ぞ」と「こそ」。および、断定の「なり」における「こそ」に一例）見られるだけである。その中には構文の見方によっては必ずしも破格と扱えないもの、あるいは、「ぞや」のようなものを「ぞ」と「や」の二つに数えてあるが、複合係助詞として一つに数えれば、破格の数はわずかに二例となり、散文における全用例五八一例に対しては、わずか〇・三％という値でしかないことになる。流布本の係り結びは文法的に完璧に近いと言えるであろう。初めに別扱い

にした和歌における三例の係り結びにも破格は全然見られない。